

新たな「国土のグランドデザイン」有識者懇談会(2014.3.5)

国土における農山村の 現状と展望

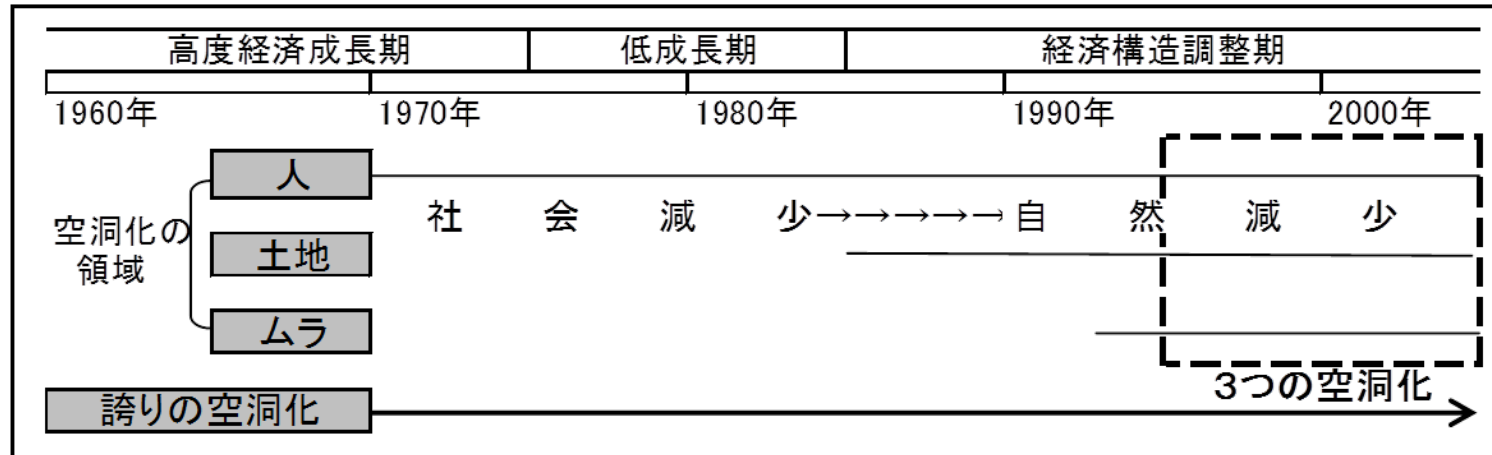
—多自然居住地域創造を目指す「小さな拠点」—

小田切 徳美(明治大学)

I. 農山村の現状

1. 「3つの空洞化」の段階的進行

図 中山間地域における空洞化の進展(模式図)



■各キーのキーワード=造語 ←強いインパクト

○人の空洞化 →「過疎」

○土地(利用)の空洞化 →「中山間地域」

○ムラの空洞化 →「限界集落」

I. 農山村の現状

2. 空洞化の広がり

■ 広がり(「土地の空洞化」のケース)

地域別・地域類型別に見た農地面積減少率

(単位：%)

	1990年～1995年					1995年～2000年					2000年～2005年				
	地域計	都市的	平地	中間	山間	地域計	都市的	平地	中間	山間	地域計	都市的	平地	中間	山間
北海道	0.8%	5.4%	0.1%	0.3%	2.2%	2.6%	6.8%	1.1%	3.6%	4.4%	2.9%	5.3%	1.9%	3.7%	4.1%
東北	4.7%	7.4%	2.9%	5.8%	7.6%	4.8%	7.2%	3.2%	5.8%	8.1%	6.6%	10.2%	5.1%	7.7%	8.2%
北陸	5.6%	6.7%	4.2%	7.3%	7.0%	6.4%	6.8%	5.0%	7.9%	10.2%	9.3%	9.5%	9.1%	9.0%	11.1%
北関東	6.2%	8.3%	5.1%	7.8%	10.2%	6.8%	9.9%	5.5%	8.1%	12.0%	8.3%	10.9%	7.3%	8.8%	12.4%
南関東	9.1%	11.7%	6.3%	10.0%	20.5%	9.3%	10.8%	7.1%	13.5%	19.8%	8.5%	10.6%	6.3%	11.5%	13.5%
東山	8.8%	11.0%	6.8%	8.7%	10.6%	9.2%	11.5%	6.8%	9.3%	11.2%	9.9%	10.5%	9.0%	10.2%	10.5%
東海	7.3%	9.2%	4.5%	6.3%	9.4%	6.9%	8.1%	4.7%	6.6%	9.4%	10.4%	11.7%	9.0%	9.6%	11.6%
近畿	6.3%	10.6%	3.6%	4.8%	6.4%	6.0%	8.8%	3.8%	4.9%	7.6%	8.8%	10.8%	8.0%	7.5%	9.9%
山陰	7.5%	8.8%	5.0%	7.9%	8.4%	10.2%	12.2%	7.8%	10.2%	11.4%	12.3%	12.2%	13.3%	12.4%	11.2%
山陽	9.6%	11.9%	7.0%	9.8%	8.6%	10.0%	12.8%	6.1%	9.5%	11.1%	12.0%	15.0%	8.7%	11.9%	11.8%
四国	9.7%	8.3%	6.8%	10.4%	14.4%	9.1%	9.4%	6.3%	9.4%	12.4%	11.5%	12.4%	9.8%	12.0%	11.6%
北九州	9.1%	11.1%	6.9%	10.5%	10.8%	6.7%	8.1%	4.7%	8.2%	10.0%	7.2%	9.4%	5.2%	8.4%	10.6%
南九州	7.8%	11.1%	5.8%	7.9%	9.4%	5.2%	9.3%	2.0%	5.7%	8.7%	7.4%	13.4%	4.2%	8.0%	8.5%
沖縄	11.7%	20.4%	6.5%	17.3%	6.8%	8.3%	13.5%	5.2%	11.8%	8.0%	12.6%	17.4%	10.1%	9.1%	21.3%
全国	5.5%	9.3%	3.4%	6.0%	7.0%	5.7%	8.9%	3.6%	6.4%	8.1%	7.1%	10.5%	5.4%	7.6%	8.4%

注1)：網掛けの地域は、農地面積減少率が農家戸数減少率を超える地域を示す。

注2)：ゴチックは、前期の変化と比較して農地面積減少率が増大した地域である。

※中国山地から「東進」+「里くんだり」

⇒空洞化フロンティアはさらに地方中小都市へ

Ⅱ. 空洞化に抗する「地域づくり」

1. 対抗軸としての「地域づくり」

■地域づくり＝「時代にふさわしい新しい価値を、地域それぞれの特性のなかで見出し、地域に上乗せする」(宮口侗迪氏)

■その意味

①内発性

②総合性・多様性

③革新性

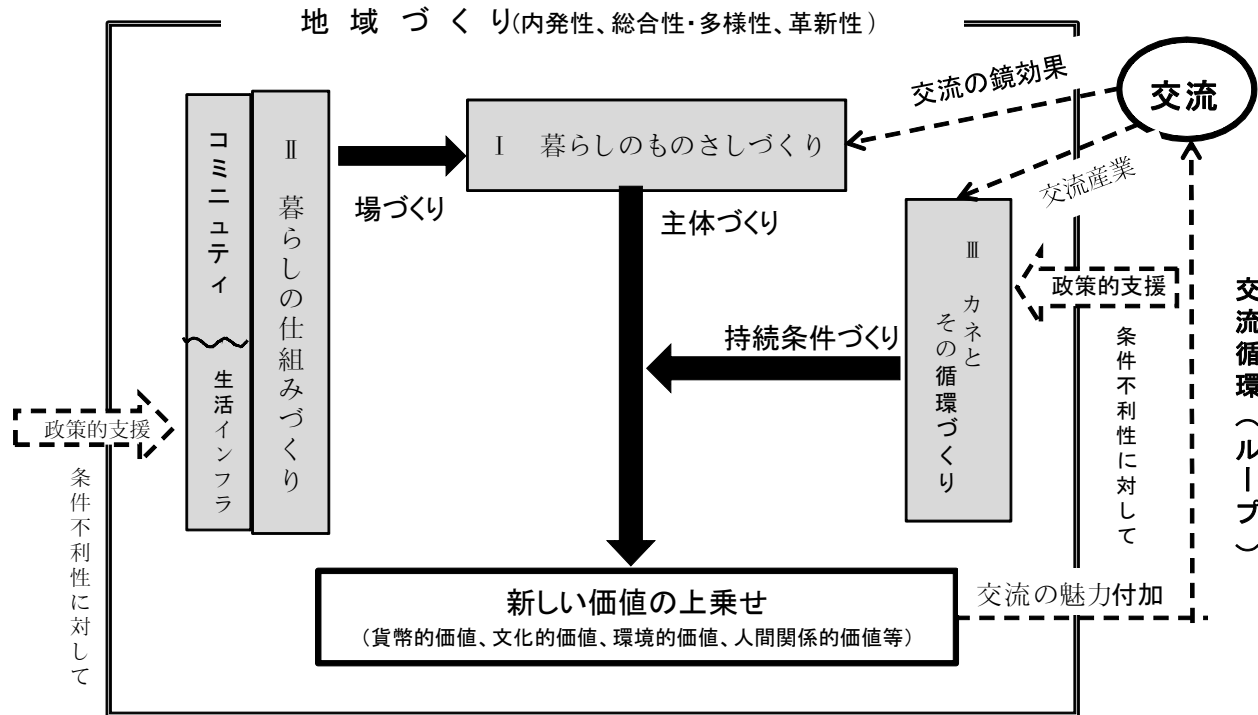
⇒各地の実践の積み重ねが始まる

Ⅱ. 空洞化に抗する「地域づくり」

2. 地域づくりのフレームワーク

■ 各地の実践のフレームワーク

農村地域における「地域づくり」のフレームワーク



※主体、場、持続条件という3要素による組み立て

Ⅱ. 空洞化に抗する「地域づくり」

- 都市農村交流と地域づくりー二つのルートー
 - 1) 交流の鏡効果→「暮らしのもののさしづくり」
 - ・ 都市住民が「鏡」＝農村の「宝」を写し出す
 - 農村サイド（ホスト）の再評価
 - 2) 交流産業→「カネとその循環づくり」
 - ・ ホストとゲストの「学び合い」が付加価値
 - 高いリピーター率＝成長産業の可能性
- ⇒ 地域づくりの「交流循環」
- ・ 上記を通じて、「新しい価値」の更なる上乗せ
- ※都市農村交流は地域再生のための戦略的活動**

Ⅲ. 新たな動向

■ 相反する新たなベクトル

現状＝下りのエスカレーターを上る（今村奈良臣氏）

①「2015年問題」（藤山浩氏）

・昭和ヒトケタ世代の完全リタイア

→ 加速化する下りのエスカレーター

②若者を中心として「田園回帰」の流れ

・ただし、まだ安定的な動きではない

→ 上りのエスカレーターへの乗り換えも

※まずは、必要な「踊り場」づくり

Ⅲ. 新たな動向

■ 地域おこし協力隊

・ 制度概況

地方自治体が都市住民を受け入れ委嘱(最長3年)

特別交付税による財政支援

=報酬等(上限200万円)+活動費(上限200万円)

・ 現況

2013年度 = **978名** ← 617(2012年) ← 413(2011年)

20~30歳代 = 80% 女性 = 37%(2012年)

・ 任期後の地元定着状況

56%が任地またはその周辺に定住(2013年終了者)

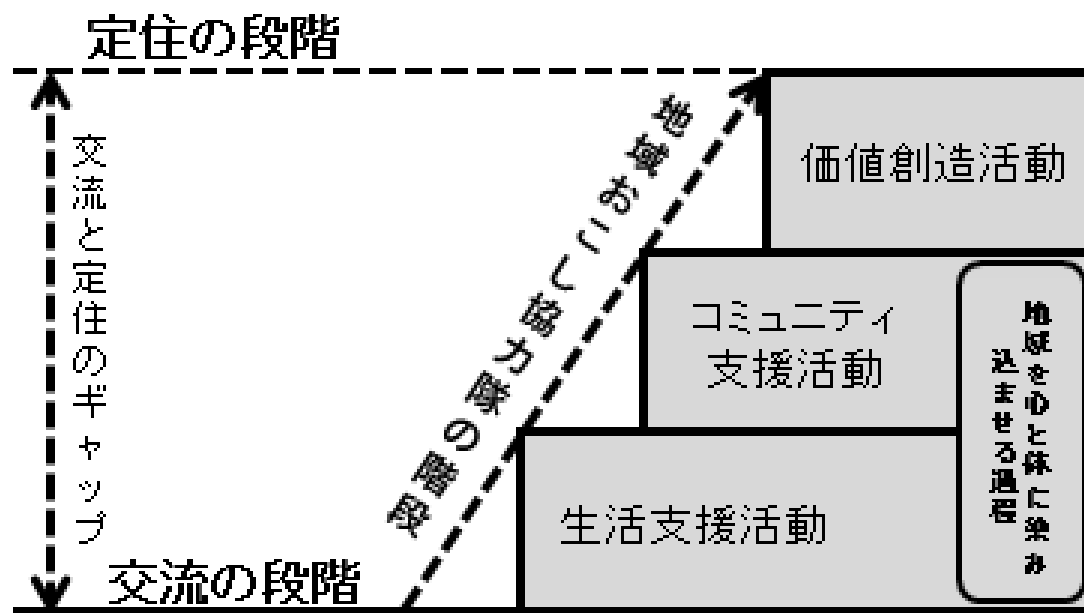
Ⅲ. 新たな動向

・協力隊の役割

= < 交流 → 定住 > の媒介項 (「階段」)

※ 交流 → 協働 (協力隊) → 定住 という流れが実現

図 地域おこし協力隊制度の意味 (模式図)



Ⅲ. 新たな動向

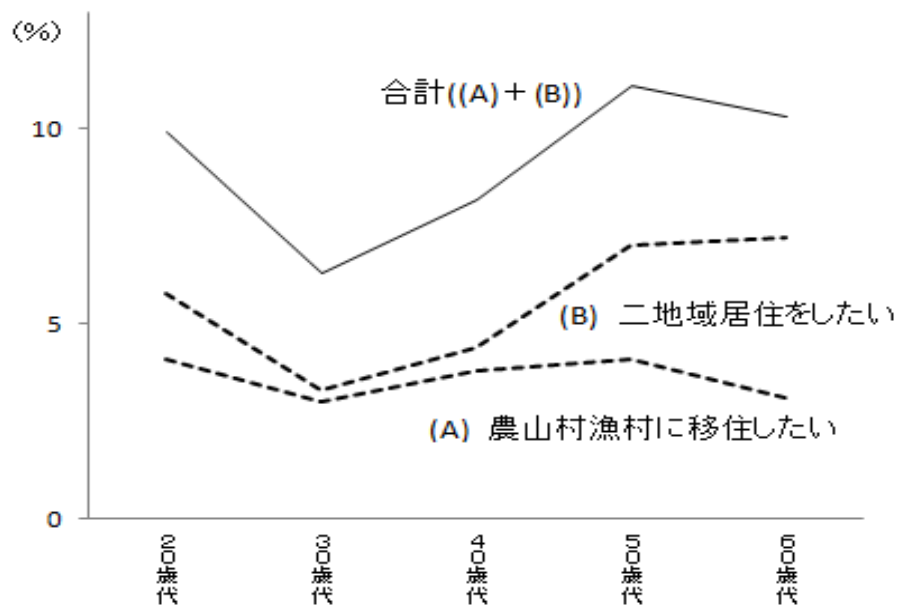
■ 背景となる若者意識

・3つのタイプの「田園回帰」

① 仕事探し派 ② 自分探し派

③ 貢献の場探し派（居場所・出番探し）— 最大

図 都市住民の農山漁村に対する移住意識(アンケート結果)



注：1) 資料 = 国土交通省「集落地域に関する都市住民アンケート結果」(2012年10月実施)の結果表より作成した。

2) 都市住民3220人を対象としたインターネット上のアンケート調査による。

Ⅲ. 新たな動向

■ 人口動向

- ・過疎の起点・中国山地で、事例的に生まれている人口社会増加

中国新聞(2014年1月1日)
「里山・里海 再評価の流れ」



山陰中央新報(2014年2月11日)
「離島、山間でも「社会増」」

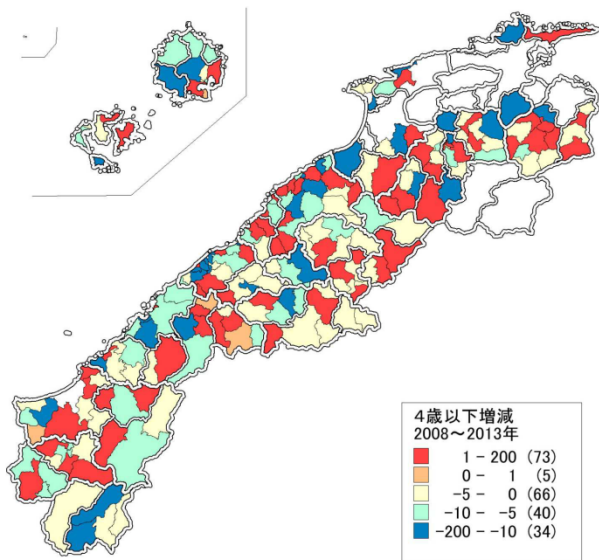


Ⅲ. 新たな動向

■ 子ども人口の動向 (中山間研究センター・藤山浩氏の分析)

(2) 4歳以下の子供増減数

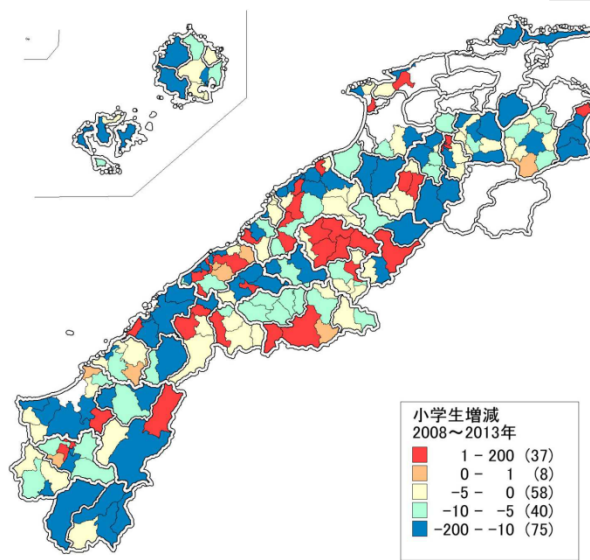
速報暫定版



しかし、山間部・離島を中心に、4歳以下の子供を維持・増加している地域が増加(2005〜2010年時には、子供数の維持・増加を果たしているエリアは72エリア)

小学生の増減数

速報暫定版



小学生についても、山間部(特に美郷町)で増えている地域が目立つ

→ 山間部・離島部で見られる子どもの増加

Ⅲ. 新たな動向

■ 人口動向の意味

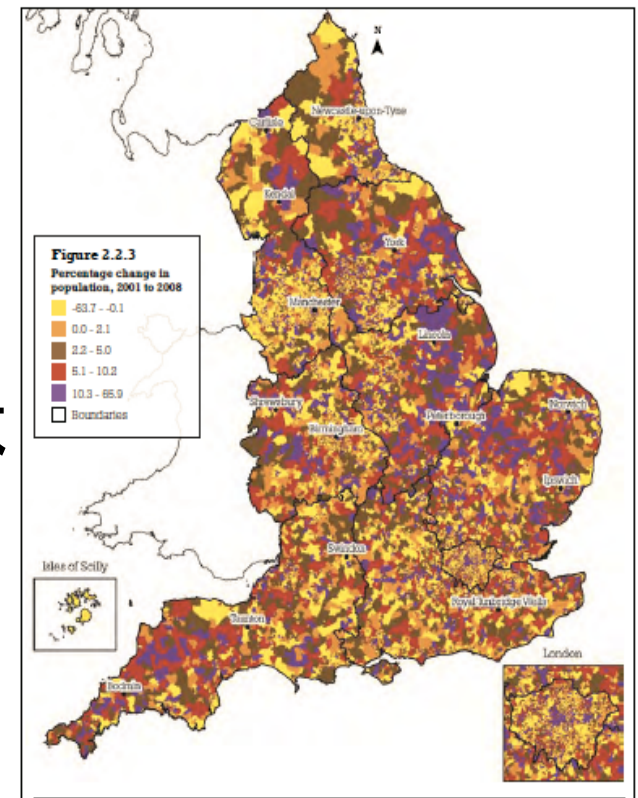
▪ 日本版「逆都市化」の潮流か？

→ まだ微弱なものであり、
今後の推移が注目される

▪ <参考> 英国・イングランドの現状

= 引き続き農村移住

→ 人口増加率 農村 > 都市
全体として「まだら」(not「帯」)



The Commission for Rural Communities "State of the countryside 2010"

IV. 展望－新たな戦略の構築へ－

■五全総「多自然居住地域論」の再評価

・『21世紀の国土のグランドデザイン』（1998年）

「中小都市と中山間地域等を含む農山漁村等の豊かな自然環境に恵まれた地域を、21世紀の新たな生活様式を可能とする国土のフロンティアとして位置付けるとともに、地域内外の連携を進め、都市的なサービスとゆとりある居住環境、豊かな自然を併せて享受できる誇りの持てる自立的な圏域として、「多自然居住地域」を創造する」

・課題＝それを実現する①条件、②手法が未成熟

→早すぎた「多自然居住地域論」

IV. 展望－新たな戦略の構築へ－

■その原点＝宮口侗迪氏の「低密度居住地域論」

「『山村とは、非常に少ない数の人間が広大な空間を面倒みている地域社会である』という発想を出発点に置き、少ない数の人間が山村空間をどのように使えば、そこに次の世代にも支持される暮らしが生み出し得るのかを、追求するしかない。これは、多数の論理の上に成り立っている都市社会とは別の仕組みを持つ、いわば先進的な少数社会を、あらゆる機動力を駆使してつくり上げることに他ならない。」(同『地域を活かす』、1998年)

※「先進的な少数社会」づくりの手法が残された論点

IV. 展望－新たな戦略の構築へ－

■「小さな拠点」構想

・新たな手法へのチャレンジ

2009年度－国交省過疎集落研究会

2010年度－国土審議会集落課題検討委員会

2012年度－「小さな拠点」形成推進研究会

2013年度－上記モニター調査（全国12箇所）

・その意義（私論）

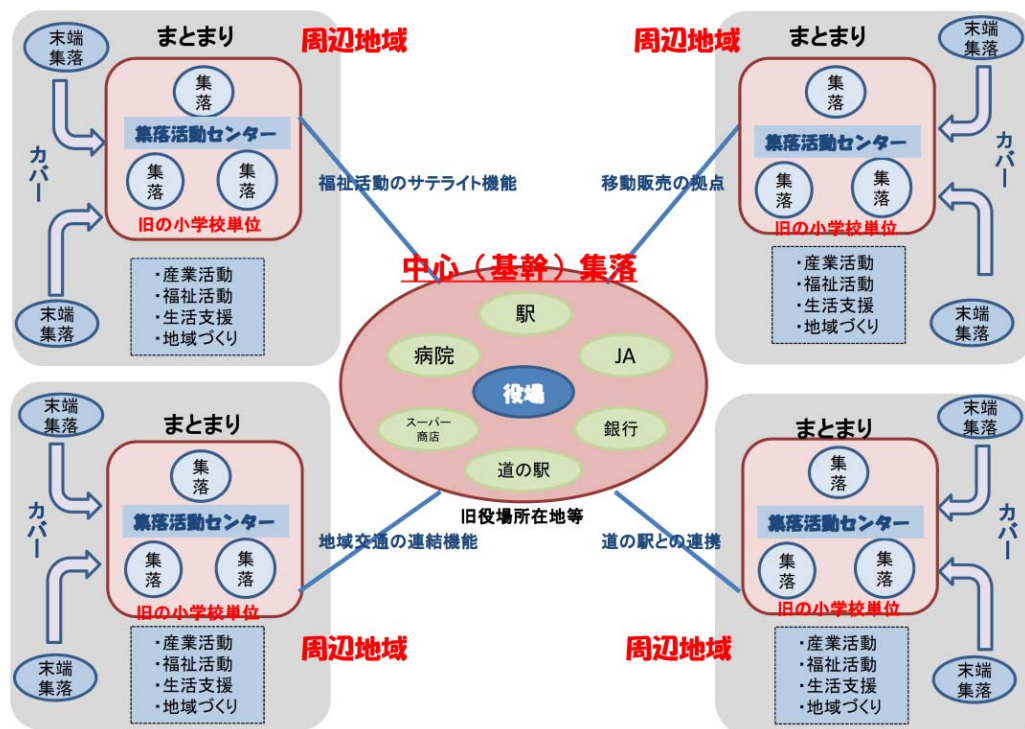
＝多自然居住地域へ向けた「踊り場」づくり（先述）

IV. 展望－新たな戦略の構築へ－

■先発する高知県「集落活動センター」

- ・10年間で県内130箇所を構想(2012年度)
- ・2013年度に13箇所設置

■集落活動センターの設置イメージ



出所＝高知県資料

IV. 展望—新たな戦略の構築へ—

■「小さな拠点」構想のイメージ

・ダム（機能拠点の形成）&ハブ（複数集落の連携）

小学校区など、複数の集落が集まる地域において、
商店、診療所などの生活サービスや地域活動を、
歩いて動ける範囲でつなぎ、各集落とコミュニティバスなどで結ぶことで、
人々が集い、交流する機会が広がっていく。
新しい集落地域の再生を目指す取組み、
それが「小さな拠点」です。



IV. 展望－新たな戦略の構築へ－

■「小さな拠点」の機能

＜暮らしの安心を守る機能＞＝**守りの機能**

- ①生活サービスのワンストップ拠点
- ②住民の見守り・目配りの拠点

＜未来を拓く機能＞＝**攻めの機能**

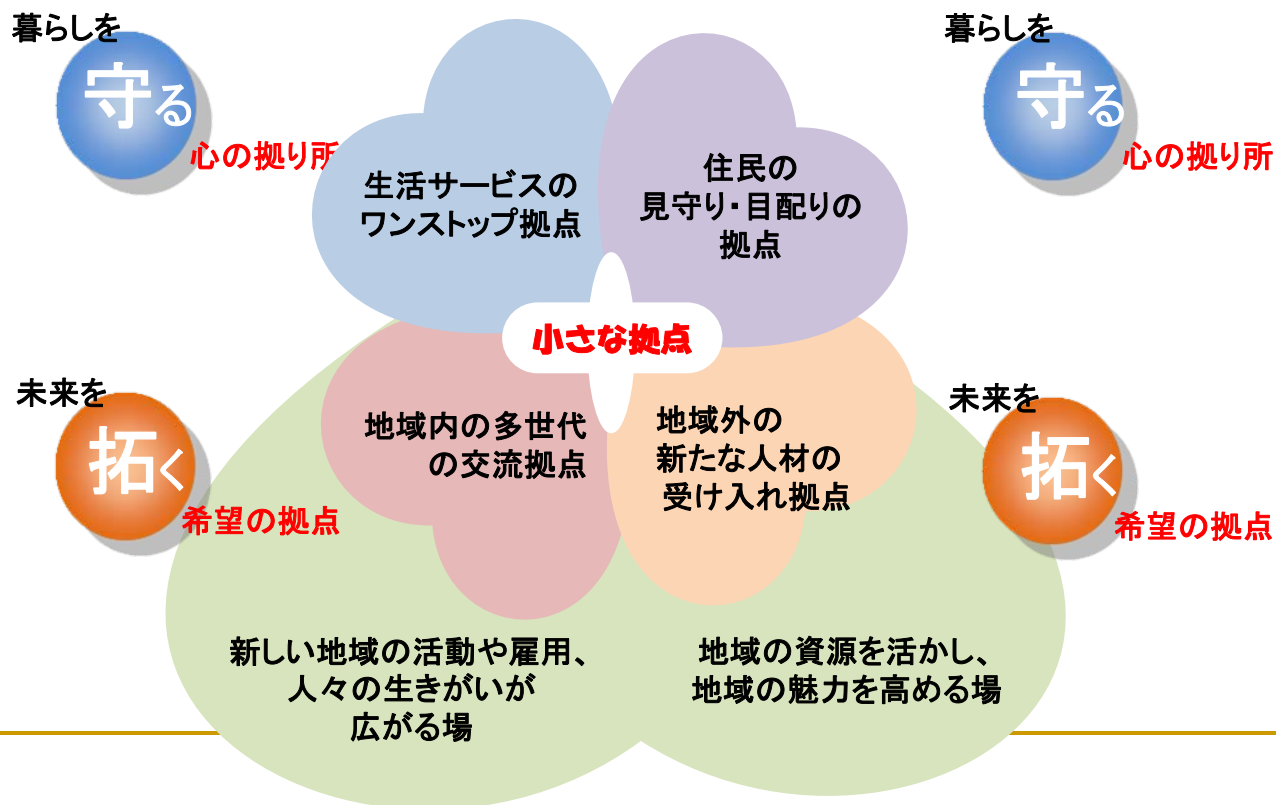
- ①地域内の多世代の交流拠点
- ②地域外の**新たな人材の受け入れ拠点**
- ③新しい地域の活動や雇用、人々の生きがい
が広がる場
- ④地域の資源を活かし、地域の魅力を高める場

※大きな安心と希望をつなぐ「小さな拠点」

IV. 展望－新たな戦略の構築へ－

■ 今後の課題

- ① 束ねる力（地域コーディネーター）
- ② 拠点から各集落へのアクセス（機能を届ける方法）



IV. 展望－新たな戦略の構築へ－

■「小さな拠点による多自然居住地域創造」の意義

- ①新しいライフスタイルの実現
- ②国内戦略地域（国際的戦略物資である食料、水、エネルギー、CO2吸収源の供給地）の持続的確保
- ③都市における「過疎地」再生の先発的モデル
農山村＝解体のフロンティア（「課題先進地域」）
再生のフロンティア（「先発地域」）

以上